

## 研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-142	A-169	23-100	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>			
Using repeated measures to study the contribution of alcohol consumption and smoking to the social gradient in all-cause mortality: Results from the Stockholm Public Health Cohort アルコール消費と喫煙が全死因死亡率の社会的勾配に与える影響に対する反復測定による研究：ストックホルム公衆衛生コホートからの結果			
<b>執筆者</b>			
Berg L, Landberg J, Thern E.			
<b>掲載誌</b>			
Drug Alcohol Rev. 2023 Nov;42(7):1850-1859. doi: 10.1111/dar.13759.			
<b>キーワード</b>			<b>PMID</b>
飲酒、死亡率、反復測定、喫煙、社会経済的地位			37830637
<b>要 旨</b>			
<p><b>目的：</b>消費行動における社会的勾配は、健康格差の一旦を説明することが示唆されている。先行研究の大部分はベースラインでの測定しか行っておらず、経時的な行動変化については考慮されていない。本研究はアルコール消費と喫煙が死亡率の社会的勾配に寄与するかを調査すること、また1回だけのベースライン評価と比較して、繰り返し測定を行うことで、主な関連性の減衰が大きくなるかどうかを評価することを目的とした。</p> <p><b>方法：</b>2006～2014年に行われた人口ベースのストックホルム公衆衛生コホートの縦断調査データを用いた。2018年までの死亡に関する登録データとリンクさせ、13,688人（ベースライン時年齢：25-70歳、女性56.1%）を対象とした。社会経済的要因(SEP)と全死因死亡率に関して、コックス回帰分析を行いハザード比と95%信頼区間(CI)を算出した。</p> <p><b>結果：</b>低いSEPは、高いSEPと比較して死亡率増加と関連していた。職業的地位についてはハザード比1.56(95%CI 1.30-1.88)、教育についてはハザード比1.77(95%CI 1.49-2.11)であり、人口統計学的特性で調整後もこの関連は有意であった。繰り返し測定を用いた場合、アルコール消費と喫煙は、職業的地位と全死亡率の関連の44%を説明した。繰り返し測定とベースライン測定を比較すると、アルコール消費の減少率は11%から18%に増加したが、喫煙については同様のままであった(25%-23%)。</p> <p><b>結論：</b>喫煙とアルコール消費は、SEPと死亡率の関連の大部分を説明するものであった。時間固定モデルと時間変動モデルの結果を比較すると、全体の減少率は、主にアルコール消費によって説明される割合が増加したことに起因するものであった。繰り返し測定は、SEPと死亡率の関連におけるアルコール消費の寄与をより正確に推定するものであるが、喫煙については関連が認められなかった。</p>			